

論文

難の中の難

青木 玲

はじめに

「正信偈」依経段の、

弥陀仏本願念仏ハ 邪見憍慢惡衆生

信樂受持スルコト 甚以難タテシ 難中之難ノ無過タルハニレ斯

弥陀仏の本願念仏は、邪見憍慢の惡衆生、  
信樂受持すること、はなはだもつて難し。

難の中の難、これに過ぎたるはなし。

（『教行信証』『行卷』・『真宗聖典』二〇五頁）  
という四句の中には、繰り返し「難」という言葉が出てくる。ただ「難しい」ではなく、「はなはだもつて難し」、また「難の中の難、これに過ぎたるはなし」と述べられている。

親鸞は、『歎異抄』第二条に、

親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、  
信ずるほかに別の子細なきなり。

（『真宗聖典』六二七頁）

とあるように、「よきひと」法然の「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」という教えを信じ

るだけである、と述べている。「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」という教えは、前に引用した「正信偈」の文で言えば、「弥陀仏の本願念仏」である。このことについて、「正信偈」に、

易行の水道、樂しきことを信樂せしむ。

（『教行信証』『行卷』・『真宗聖典』二〇五頁）

とあるように、「易行」と述べられている。したがって、「弥陀仏の本願念仏」という行自体が難しいというわけではない。「信樂受持」すること、はなはだもって難し」と述べられるように、「弥陀仏の本願念仏」を「信樂受持」することが難しいのである。

では、なぜ「弥陀仏の本願念仏」を「信樂受持」することが難しいのだろうか。本論文では、このことについて、依経段の結びにある「弥陀仏本願念仏」から始まる四句を通して考察していきたい。

## 一、「正信偈」依経段・釈迦章の展開

「正信偈」依経段は、弥陀章と釈迦章に分けられる。弥陀章は、次の部分である。

法蔵菩薩の因位の時、世自在王仏の所にましまして、

諸仏の浄土の因、国土人天の善惡を觀見して、

無上殊勝の願を建立し、希有の大弘誓を超發せり。

五劫、これを思惟して摂受す。重ねて誓うらくは、名声十方に聞こえんと。

あまねく、無量・無辺光、無碍・無对・光炎王、

清浄・歡喜・智慧光、不断・難思・無称光、

超日月光を放つて、塵刹を照らす。一切の群生、光照を蒙る。

本願の名号は正定の業なり。至心信樂の願を因とす。

等覺を成り、大涅槃を証することは、必至滅度の願成就なり。

〔『教行信証』「行巻」・『真宗聖典』二〇四頁〕

また、釈迦章は、次の部分である。

如来、世に興出したまうゆえは、ただ弥陀本願海を説かんとなり。

五濁惡時の群生海、如来如実の言を信ずべし。

よく一念喜愛の心を発すれば、煩惱を断ぜずして涅槃を得るなり。

凡聖、逆謗、ひとしく回入すれば、衆水、海に入りて一味なるがごとし。

摂取の心光、常に照護したまう。すでによく無明の闇を破すといえども、

貪愛・瞋憎の雲霧、常に真信心の天に覆えり。

たとえば、日光の雲霧に覆わるれども、雲霧の下、明らかにして闇きことなきがごとし。

信を獲れば見て敬い大きに慶喜せん、すなわち横に五惡趣を超截す。

一切善惡の凡夫人、如来の弘誓願を聞信すれば、

仏、廣大勝解の者と言えり。この人を分陀利華と名づく。

（同前）

この釈迦章を受けて述べられるのが、

弥陀仏の本願念仏は、邪見憍慢の惡衆生、

信樂受持すること、はなはだもつて難し。難の中の難、これに過ぎたるはなし。

〔『教行信証』「行巻」・『真宗聖典』二〇五頁〕

という四句である。では、釈迦章にはどのようなことが明らかにされているのだろうか。まずは、釈迦章

の展開を確認したい。

釈迦章は、次の文から始まっている。

如来、世に興出したまうゆえは、ただ弥陀本願海を説かんとなり。

五濁患時の群生海、如来如実の言を信ずべし。

『教行信証』『行巻』・『真宗聖典』二〇四頁

ここには、釈尊の出世本懐が述べられ、「如来如実の言を信ずべし」とあるように、釈尊が説いた言葉を信じるのが勧められている。「如来如実の言」とは、「弥陀本願海」が説かれる『大無量寿経』であり、「南無阿弥陀仏」であろう。「如来如実の言を信ずべし」という勧めを受けて、信心について述べられているのが次の句である。

よく一念喜愛の心を発すれば、煩惱を断ぜずして涅槃を得るなり。

(同前)

ここから、信心の利益が示される。そして、獲信について次のように述べられている。

信を獲れば見て敬い大きに慶喜せん、すなわち横に五惡趣を超越す。

『教行信証』『行巻』・『真宗聖典』二〇五頁

「信を獲れば見て敬い大きに慶喜せん(獲信見敬大慶喜)」について、親鸞真筆の『教行信証』である「坂東本」では、何度も文言が改訂されている<sup>①</sup>。この部分は、最終的に、

獲信見敬大慶人、

(『顕浄土真実教行証文類 翻刻篇』一三九頁、傍点筆者)

と記されている。これによって、「獲信」において「見敬大慶人」という「人」になることを明らかにしている<sup>②</sup>。このことについて、『尊号真像銘文』には、

「獲信見敬得大慶」というのは、この信心をえて、おおきによろこびうやまう人というなり。…中略…「即横超越五惡趣」というのは、信心をえつればすなわち、横に五惡趣をさるなりとしるべしとなり。即横

超は、即はすなわちという、信をうる人は、ときをへず、日をへだてずして正定聚のくらいにさだまるを即というなり。横はよこさまという、如来の願力なり。他力をもうすなり。超はこえてという。生死の大海をやすくよこさまにこえて、無上大涅槃のさとりをひらくなり。

（『真宗聖典』五三二頁、中略筆者）

とあるように、「この信心をえて、おおきによりこびうやまう人」と述べられている。そして、「獲信」の「人」は、「ときをへず、日をへだてずして正定聚のくらいにさだま」り、「生死の大海をやすくよこさまにこえて、無上大涅槃のさとりをひらく」のである<sup>③</sup>。

さらに、「獲信見敬大慶人 即横超截五惡趣」の後には、

一切善惡の凡夫人、如来の弘誓願を聞信すれば、

仏、廣大勝解の者<sup>ひと</sup>と言えり。この人を分陀利華と名づく。

（『教行信証』「行巻」・『真宗聖典』二〇五頁）

と述べられている。この中に、「一切善惡の凡夫人」、「この人を分陀利華と名づく」と、繰り返し「人」が出てくる。また、「廣大勝解の者」の「者」について、親鸞は「ひと」と読んでいた<sup>④</sup>。

このように、釈迦尊では「如来如実の言を信ずべし」と勧め、信心について「獲信見敬大慶人」以下で「獲信」によってどのような「人」になるのかが明らかにされているのである。

## 二、邪見憍慢惡衆生

以上の展開を受けて、「弥陀仏の本願念仏は、邪見憍慢の惡衆生」と述べられている。「弥陀仏の本願念

仏」は、親鸞が「信ずべし」と勧めている「如来如実の言」であり、「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」という教えであろう。

「邪見憍慢悪衆生」は、『大無量寿経』『東方偈』の文、また、『無量寿如来会』と『無量清浄平等覚経』の次の文に依っていると考えられる<sup>⑤</sup>。

憍慢と弊と懈怠とは、もつてこの法を信じ難し。

（『大無量寿経』『東方偈』・『真宗聖典』五〇頁、傍線筆者）

懈怠・邪見・下劣の人は、如来のこの正法を信ぜず。

（『無量寿如来会』・『真宗聖教全書』一・二二三頁、傍線筆者）

悪と驕慢と弊と懈怠のものは、もつてこの法を信すること難し。

（『無量清浄平等覚経』・『真宗聖教全書』一・一〇〇頁、傍線筆者）

「邪見」は、邪な見方、考え方である。親鸞は、「邪見」について、

我が所説のごとし、一切悪行は邪見なり。一切悪行の因、無量なりといえども、もし邪見を説けばすなわちすでに摂尽しぬ。

（『教行信証』『化身土巻』・『真宗聖典』三五二頁）

とあるように、「一切悪行の因」と確かめている。「憍慢」は、「憍」に「オコル」、「慢」に「アナトル」と左訓があるように<sup>⑥</sup>、思ひ上がり、他人をあなどることである。

さて、「邪見憍慢悪衆生」について、『真宗聖典』では「邪見憍慢の悪衆生」と書き下しされている。この場合、「悪衆生」の内容を「邪見憍慢」に確かめることができる。しかし、「坂東本」を見ると、「邪見

「憍慢惡衆生」とあるように、「憍慢」と「惡衆生」の間に「の」の字はない<sup>⑦</sup>。これによって、親鸞は「邪見憍慢惡」が「衆生」であることを表していると言えよう<sup>⑧</sup>。

### 三、「信樂受持」すること甚だ難し

「邪見憍慢惡衆生」の次に、「信樂受持すること、はなはだもつて難し。難の中の難、これに過ぎたるはなし」と述べられている。これは、『大無量寿経』「流通分」の文に依っている。

仏、弥勒に語りたまわく、「如来の興世、値い難く見たてまつり難し。諸仏の経道、得難く聞き難し。菩薩の勝法、諸波羅蜜、聞くことを得ることまた難し。善知識に遇い、法を聞きて能く行ずること、これまた難しとす。もしこの経を聞きて信樂受持すること、難きが中に難し、これに過ぎて難きことなし（信樂受持、難中之難、無過此難）。このゆえに我が法、かくのごとく作し、かくのごとく説き、かくのごとく教う。应当に信順して法のごとく修行すべし。」

（『真宗聖典』八七頁、傍線・括弧内筆者）  
『大無量寿経』と「正信偈」の言葉を比較すると次のようになる。

信樂受持、難中之難、無過此難

（『大無量寿経』、傍線筆者）

信樂受持甚以難 難中之難無過斯

（「正信偈」、傍線筆者）

「正信偈」には、「甚以難」が加えられ、「無過此難」が「無過斯」となっている。

さて、『大無量寿経』「流通分」には、「如来の興世、値い難く見たてまつり難し」・「諸仏の経道、得難く聞き難し。菩薩の勝法、諸波羅蜜、聞くことを得ることまた難し」・「善知識に遇い、法を聞きて能く

行ずること、これまた難しとす」と三つの「難」が説かれ、これを受けて、「もしこの経を聞きて信樂受持すること、難きが中に難し、これに過ぎて難きことなし」と説かれている<sup>⑨</sup>。『大無量寿経』を聞いて、信じ受けとめて持つことは、難の中でも難であり、これに過ぎて難しいことはない。親鸞は、この文に依って、「弥陀仏の本願念仏」は「邪見憍慢惡衆生」には「信樂受持すること、はなはだもって難し。難の難、これに過ぎたるはなし」と述べている。つまり、「弥陀仏の本願念仏」を「信樂受持」することは、「邪見憍慢惡衆生」の故に甚だ難しいのである。

それでは、「弥陀仏の本願念仏」を「信樂受持」することが甚だ難しいとは、具体的にどういうことだろうか。これについて、親鸞と法然の出遇いを通して考察したい。親鸞は、法然との出遇いの意味を『教行信証』『化身土卷』に、

しかるに愚禿釈の鸞、建仁辛の酉の暦、雜行を棄てて本願に帰す。

(『真宗聖典』三九九頁)

と述べ、また『歎異抄』第二条には、

親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。

(『真宗聖典』六二七頁)

と述べている。二十九歳の時の法然との出遇いは、如来の本願との出遇いであり、「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」という教えとの出遇いである。この出遇いは、換言すれば、「ただ念仏して、弥陀にたすけられ」る自身との出遇いである。

このように、「よきひと」法然と出遇い、「ただ念仏」する身となったからこそ課題になったのが、「弥陀仏の本願念仏」を「信樂受持」することが甚だ難しい、ということではないだろうか。それは、例えば、親鸞四十二歳の時の三部経千部読誦、また、五十九歳の時の『大無量寿経』の読誦に窺うことができる。



この二つの出来事は、『恵信尼消息』第五通に示されている。

善信の御房、寛喜三年四月十四日午の時ばかりより、風邪心地すこしおぼえて、その夕さりより臥して、大事におわしますに、腰・膝をも打たせず、天性、看病人をも寄せず、ただ音もせずして臥しておわしませば、御身をさぐれば、あたたかなる事火のごとし。頭のうたせ給う事もなのめならず。さて、臥して四日と申すあか月、苦しきに、「今はさてあらん」と仰せらるれば、「何事ぞ、たわごととかや申す事か」と申せば、「たわごとにてもなし。臥して二日と申す日より、『大経』を読む事、ひまもなし。たまたま目をふさげば、経の文字は一字も残らず、きららかに、つぶさに見ゆる也。さて、これこそ心得ぬ事なれ。念仏の信心より外には、何事か心にかかるべきと思ひて、よくよく案じてみれば、この十七八年がそのかみ、

（『真宗聖典』六一九頁）

ここには、まず寛喜三（一二三一）年、親鸞五十九歳の出来事が記されている。この年は、前年（一二三〇年）からの冷害で、未曾有の大飢饉が起こった年と言われている<sup>⑩</sup>。親鸞は、風邪を引き、高熱が出て、頭痛もひどい中、次のように恵信尼に伝えたという。「臥して二日と申す日より、『大経』を読む事、ひまもなし。たまたま目をふさげば、経の文字は一字も残らず、きららかに、つぶさに見ゆる也」とあるように、寝込んで二日目から『大無量寿経』を休むひまなく読誦し、目をふさげば『大無量寿経』の文字が一字残らずはつきりと見える、と。このことを通して、念仏の信心の他に何事か心にかかるだろうかと思ひ、よくよく案じてみると、十七年前<sup>⑪</sup>、つまり、建保二（一二一四）年、親鸞四十二歳の時の三部経千部読誦を思い起こした。

建保二年も、天候不順で、日照りが続いたと言われている<sup>⑫</sup>。そのような状況の中、三部経千部読誦を始めたことが示されるのが次の文である。

げにげにしく『三部経』を千部読みて、衆生利益のためにとて、読みはじめてありしを、これは何事ぞ、自信教人信、難中転更難とて、身ずから信じ、人をおしえて信ぜしむる事、まことの仏恩を報いたてまつるものと信じながら、名号の他には、何事の不足にて、必ず経を読まんとするやと、思いかえして、読まざりしことの、さればなおも少し残るところのありけるや。人の執心、自力の心は、よくよく思慮あるべしと思ひなして後は、経読むことは止りぬ。

(同前)

「げにげにしく」は、「実に実にしく」と書き、「もつともらしい」という意味である<sup>13</sup>。親鸞は、「衆生利益のために」もつともらしく浄土三部経を読み始めたのである。しかし、「これは何事ぞ、自信教人信、難中転更難とて、身ずから信じ、人をおしえて信ぜしむる事、まことの仏恩を報いたてまつるものと信じながら、名号の他には、何事の不足にて、必ず経を読まんとするや」と思い返して、三部経を読むことを止めた。「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」という教えを自ら信じ、人に教えて信じさせることが仏恩に報いることと信じながら、どうして三部経を読もうとするのか。そう思い返して、経を読むことを止めたにも関わらず、「さればなおも少し残るところのありけるや」とあるように、なお「衆生利益のために」三部経千部読誦しようとする心が残っていたことに、五十九歳の『大無量寿経』の読誦を通して気づいたのである。その心を、「人の執心、自力の心」と述べている。

親鸞は、「自力」について次のように述べている。

自力というは、わがみをたのみ、わがころをたのみ、わがちからをはげみ、わがさまさまの善根をたのみとなり。

(『一念多念文意』・『真宗聖典』五四一頁)

ここに、「わがみ」・「わがころ」・「わがさまさまの善根」を「たのみ」、「わがちから」を「はげみ」とある。この「自力」の具体性は、直前に次のように述べられている。

異学というのは、聖道外道におもむきて、余行を修し、余仏を念ず、吉日良辰をえらび、占相祭祀をこのむものなり。これは外道なり。これらはひとえに自力をたのむものなり。別解は、念仏をしながら、他力をたのまぬなり。別というは、ひとつなることをふたつにわかちなすことばなり。解は、さとするという、とくということばなり。念仏をしながら自力にさとりなすなり。かるがゆえに、別解というなり。また、助業をこのむもの、これすなわち自力をばげむひとなり。（同前）

親鸞は、「聖道外道におもむきて、余行を修し、余仏を念ず、吉日良辰をえらび、占相祭祀をこのむもの」を「ひとえに自力をたのむもの」、「念仏をしながら、他力をたのまぬ」ことを「念仏をしながら自力にさとりなす」、「助業をこのむもの」を「自力をばげむひと」と確かめている。四十二歳の三部經千部読誦、五十九歳の『大無量壽經』の読誦という二つの出来事は、「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」という教えに出遇い、「ただ念仏」する身となつたはずの親鸞が、「名号の他には、何事の不足にて」、「念仏の信心より外には、何事か心にかかるべき」とあつたように、念仏に不足を感じ、念仏以外の行を求めたことを表している。これは、「助業をこの」み、「自力をばげむひと」に他ならない。したがって、親鸞においては、念仏以外の行を求めた二つの出来事に、「弥陀仏の本願念仏」を「信樂受持」する「難」の具体性を確かめることができる。

このように、「ただ念仏して、弥陀にたすけられ」る身が、念仏以外の行を求め、「衆生利益のために」經典を読誦すること、つまり、「わがみ」・「わがこころ」・「わがさまの善根」を頼りとし、「わがちから」を励む「ひと」を、親鸞は、邪な見方で、思い上がり、他人をあなどる「邪見憍慢惡衆生」と受けとめたのではないだろうか。そのような「邪見憍慢惡衆生」にとつて、「弥陀仏の本願念仏」を「信樂受持」すること、換言すれば、「ただ念仏して、弥陀にたすけられ」る身であることを自覚することは、「はなは

だもって難し」そして、「難の中の難」である、と「正信偈」依経段の結びに明らかにされているのである。

#### 四、「難中之難無過斯」の書き換え——「此」から「斯」へ——

最後に、「難中之難無過斯」について確かめたい。前述したように、この部分について、『大無量寿経』では「無過此難」と説かれるが、「正信偈」には「無過斯」と述べられていた。

「難中之難無過斯」の「斯」の字について、「坂東本」を見ると、もともとは「此」と書いていたことが分かる<sup>⑭</sup>。つまり、親鸞は一旦「難中之中無過此」と書いて、「難中之中無過斯」と書き換えたのである。当初「此」と書いたのは、『大無量寿経』に「難中之難、無過此難」とあるためだと考えられる。では、なぜ書き換えなければならなかったのだろうか。

そのことを考えるにあたり、いくつか確認したいことがある。まずは、書き換えの時期についてである。親鸞八十三歳の時に書写された「専修寺本」には「難中之難無過斯」<sup>⑮</sup>と述べられているため、この書き換えは八十三歳以前と言えよう。

次に、『大無量寿経』「流通分」の文に関わる「正信偈」以外の著作についてである。『浄土和讃』「大經意」には、次のように詠われている。

一代諸教の信よりも 弘願の信楽なおかたし

難中之難ときたまい 無過此難とのべたまう

また、『入出二門偈』には次のように述べられている。

真宗遇いがたし、信を得ること難し、難の中の難、これ（斯れ）に過ぎたるはなけん。

（『真宗聖典』四八五頁、傍点筆者）

（『真宗聖典』四六六頁、傍線・括弧内筆者）

このことを踏まえると、『大無量寿経』本文「無過此難（これに過ぎて難きことなし）」の場合は、「此」の字、「無過斯（これに過ぎたるはなし）」の場合は、「斯」の字を用いていることが分かる。

ちなみに、「正信偈」で「斯」の字は、依経段の結びの「難中之難無過斯」と、

ただこの（斯の）高僧の説を信ずべし、と。

（『教行信証』「行卷」・『真宗聖典』二〇八頁、傍線・括弧内筆者）  
と述べられる依経段の結びに出てくる。一方、「此」の字は出てこない。

以上のことを確かめた上で、「斯」の字への書き換えについて考えていきたい。前述したように、親鸞は『大無量寿経』「流通分」の三つの「難」を受けて説かれる「もしこの経を聞きて信樂受持すること、難きの中に難し、これに過ぎて難きことなし」に依って、「弥陀仏の本願念仏」は「邪見憍慢惡衆生」にとつて「信樂受持すること、はなはだもつて難し。難の中の難、これに過ぎたるはなし」と述べていた。『大無量寿経』「流通分」に説かれる「難」は、「仏、弥勒に語りたまわく」とあるように、釈尊が衆生の事実を見て語った内容である。そこには、三つの「難」が説かれ、『大無量寿経』を聞いて信樂受持することは「難の中の難」と説かれていた。一方、「正信偈」には、「弥陀仏の本願念仏」を信樂受持することが「難の中の難」であり、それは「邪見憍慢惡衆生」の故に「難の中の難」である、と述べられていた。したがって、「信樂受持すること、はなはだもつて難し。難の中の難、これに過ぎたるはなし」は、親鸞自身が領いた内容と言えよう。「正信偈」の展開で言えば、「獲信」の「人」の自覚内容である。

では、「斯」の字にはどのような意味があるのだろうか。「斯」には、「断定の語気を強調する」という語法がある<sup>16</sup>。このことを踏まえると、親鸞は「難中之難無過斯」を通して、「わがみ」・「わがこころ」・「わ

がさまざまの善根」を頼りとし、「わがちから」を励む「邪見憍慢惡衆生」にとって、「弥陀仏の本願念仏」を「信樂受持」することほど難しいことはない、換言すれば、「信樂受持」することこそが甚だ難しいのであり、「難の中の難」である、と「信樂受持」することの「難」を強調して明らかにしているのではないだろうか<sup>17</sup>。「此」から「斯」へ書き換えたのは、このことを明らかにするためではないか、と考えている。

## おわりに

親鸞は、依経段の結びに『大無量寿経』『流通分』の文に依って、「信樂受持すること、はなはだもって難し。難の中の難、これに過ぎたるはなし」と、繰り返し「難」と述べている。では、なぜ難しいのか。それは、「邪見憍慢惡衆生」の故である。釈迦章で「信ずべし」と勧められた「如来如実の言」、つまり、「弥陀仏の本願念仏」を「信樂受持」することは、「邪見憍慢惡衆生」にとって「難の中の難」なのである。そして、「信樂受持」することが「難の中の難」の「邪見憍慢惡衆生」だからこそ、親鸞はいよいよ「弥陀仏の本願念仏」を聞信していったのである。

依経段に続いて、

印度・西天の論家、中夏・日域の高僧、

大聖興世の正意を顕し、如来の本誓、機に応ぜることを明かす。

（『教行信証』『行巻』・『真宗聖典』二〇五頁）

とあるように、依釈段が始まる。依釈段の冒頭には、インド・中国・日本の三国の高僧が、釈尊出世の正意を顕し、如来の本誓が機に応じることを明らかにした、と述べられている。依経段から依釈段への展開

は、「弥陀仏の本願念仏」を「信樂受持」することが「難の中の難」である「邪見憍慢惡衆生」のために、七高僧が「大聖興世の正意を顕し、如来の本誓、機に応ぜることを明か」したことを示しているのではないだろうか。そのように見ることができれば、依釈段は、親鸞の七高僧に対する謝念が表明されていると言えよう。

※本稿は、第四十四回九州大谷短期大学仏教学科市民大学講座（二〇二〇年一〇月四日）における講義を論文として原稿化したものである。

# 【註】

- ①『顕浄土真実教行証文類 翻刻篇』六九七頁参照。
- ②廣瀬杲は、「獲信」ということ具体性は「獲人」である」と述べている（『廣瀬杲講義集』九・一六六頁）。
- ③詳細については、拙稿「獲信の人」（『九州大谷研究紀要』四六）を参照されたい。
- ④「坂東本」では、「広大勝解の者と言えり」の「者」の右に、朱で「ト、」と書かれている（『顕浄土真実教行証文類 翻刻篇』一三九頁）。これによって、親鸞は「者と」を「ひと」と読むことを示している。
- ⑤香月院深励は、「憍慢」は『大無量寿経』『東方偈』、「邪見」は『無量寿如来会』に依ると指摘している（「正信念仏偈講義」・『香月院深励著作集』二・一三四頁）。「惡」については、『大無量寿経』の「弊」を「弊惡の義」と確かめ、「惡衆生とは弊惡のことなり」と述べている（同前）。

⑥『顕浄土真実教行証文類 翻刻篇』一三九頁。

⑦『教行信証』の「専修寺本」（『専修寺本 顕浄土真実教行証文類』上・一五九頁）・「西本願寺本」（『本願寺藏 顕浄土真実教行証文類』縮刷本上・二〇二頁）も、「坂東本」と同じように「邪見憍慢惡衆生」と述べられている。

⑧蓮如の『正信偈大意』には、次のように述べられている。

「弥陀仏本願念仏 邪見憍慢惡衆生 信樂受持甚以難 難中之難無過斯」というは、弥陀如来の本願の念仏をば、邪見のものゝ憍慢のものと惡人とは、真実に信樂したてまつること、かたきがなかにかたきことこれにすぎたるはなしと、いえるころなり。

（『真宗聖典』七五二頁）

蓮如が、「邪見憍慢惡衆生」を「邪見のものと憍慢のものと惡人」と解説するのは、親鸞の意図に沿ったものと考えられる。

今回、親鸞が「惡」をどのように見ているかは確かめることができなかった。この点については、今後の課題としたい。

⑨香月院深励は、慧遠の『無量寿経義疏』（『大正新修大藏経』三七・一一六頁上）に依って、「如来の興世、値い難く見たてまつり難し」を「見仏の難」、「諸仏の経道、得難く聞き難し。菩薩の勝法、諸波羅蜜、聞くことを得ることまた難し」を「聞法の難」、「善知識に遇い、法を聞きて能く行ずること、これまた難しとす」を「修行の難」、「もしこの経を聞きて信樂受持すること、難きが中に難し、これに過ぎて難きことなし」を「此経の難」と述べている（『浄土三部経講義上』・『香月院深励著作集』五・八三二頁）。

⑩平雅行「若き日の親鸞」（『真宗教学研究』二六・一二二頁）。

⑪『恵信尼消息』第五通の終わりには、次のように記されている。



『三部経』、げにげにしく、千部読まんと候いし事は、信蓮房の四の年、武蔵の国やらん、上野の国やらん、佐貫と申す所にて、読みはじめて、四五日ばかりありて、思いかえして、読ませ給わで、常陸へはおわしまして候いしなり。信蓮房は未の年三月三日の昼、生まれて候いしかば、今年は五十三やらんとぞおぼえ候う。

弘長三年二月十日

惠信

(『真宗聖典』六二〇頁)

三部経千部読誦は、『三部経』、げにげにしく、千部読まんと候いし事は、信蓮房の四の年」とあるように、信蓮房が四歳の時の出来事である。その信蓮房について、「信蓮房は未の年三月三日の昼、生まれて候いしかば、今年は五十三やらんとぞおぼえ候う」と述べられている。信蓮房は、「今年」＝「弘長三（一二六三）年」で五十三歳だから、建暦一（一二二一）年、親鸞三十九歳の時に誕生したことが分かる。したがって、「信蓮房の四の年」とは、建保二（一二二四）年、親鸞四十二歳の年である。三部経千部読誦について、『恵信尼消息』には、寛喜三（一二三一）年から「十七八年がそのかみ」とあるが、正確に言えば十七年前の出来事である。

⑫ 前掲平講演録（『真宗教学研究』二六・一二二頁）。

⑬ 『岩波古語辞典 補訂版』四六三頁。

⑭ 『顕浄土真実教行証文類 翻刻篇』一三九頁。

⑮ 『専修寺本 顕浄土真実教行証文類』上・一五九頁。

⑯ 『新漢語林』六三七頁。

⑰ 親鸞は、『大無量寿経』「流通分」の文に依って作られた『往生礼讃』の文を、『教行信証』「信巻」と「化身土巻」に引用している。

また云わく、仏世はなはだ値いがたし、人信慧あること難し。たまたま希有の法を聞くこと、これ（斯れ）また最も難しとす。自ら信じ人を教えて信ぜしむ、難の中に転たまた難し。大悲、弘く普く化する、真に仏恩を報ずるに成る、と。

（『教行信証』『信卷』・『真宗聖典』二四七頁、傍線・括弧内筆者、

括弧内は『顕浄土真実教行証文類 翻刻篇』二四一頁参照）

また云わく、仏世はなはだ値いがたし。人、信慧あること難し。遇希有の法を聞くこと、これ（此れ）また最も難しとす。自ら信じ人を教えて信ぜしむること、難の中に転たまた難し。大悲弘く普く化するは、真に仏恩を報ずるに成る、と。

（『教行信証』『化身土卷』・『真宗聖典』三五五頁、傍線・括弧内筆者、

括弧内は『顕浄土真実教行証文類 翻刻篇』五三九頁参照）

「信卷」は真の仏弟子を、「化身土卷」は善知識を明らかにする箇所である。この中の「これまた最も難しとす」の「これ」について、「信卷」は「斯」、「化身土卷」は「此」を用いている。このことも「難中之難無過斯」の「斯」の字の書き換えに関わっていると考えられるが、この点については今後の課題としたい。